

御岳火山の歴史噴火記録の再検討と噴気活動の歴史記録 —存在しなかった 774, 1892 年噴火—

及川輝樹¹

Teruki Oikawa (2008) Reinvestigation of the historical eruption and fumarolic activity records at Ontake Volcano, central Japan. -Misunderstanding reports about the 774 AD and 1892 AD eruptions- *Bull. Geol. Surv. Japan*, vol. 59(5/6), p. 203-210, 3 figs.

Abstract: The historical eruption records of Ontake Volcano were reexamined by this study. Previous study pointed out that there were historical eruption records of Ontake Volcano in 774 AD and 1892 AD; however, there were no description of the eruptions in the original records. Therefore, the historical eruption records of Ontake Volcano before 1979 AD phreatic eruption are undiscovered now. Probably, the Ontake Volcano did not erupt from the 18th century to 1979 eruption; however the fumarolic activities in the Jigokudani at the summit area have existed since the middle of 18th century. After 1979 eruption, the fumarolic activities are recognized in Jigokudani and Hachotarumi, which is the summit area of Ontake Volcano. In 1991 and 2007 AD, there was emission of the volcanic ash (micro eruption) from the fumaroles in Hachotarumi. The volcanic activity of Ontake volcano after 1979 eruption is the most active in 250 years recently.

Keywords: Ontake Volcano, historical record, eruption history, fumarolic activity, Kiso Ontakesan.

要 旨

御岳火山の歴史時代の噴火記録として西暦774及び1892年の記録の存在が指摘されていたが、典拠とされていた文献を再調査した結果、それら噴火は存在しないことが明らかとなった。18世紀末からの宗教登山の活発化を考慮すると、18世紀末から1979年噴火までの間、噴火はなかった可能性が高い。史料に基づく御嶽山山頂部の地獄谷において少なくとも18世紀半ばより噴気活動が継続していたが、1979年噴火の後、地獄谷の他に八丁タルミにおいても噴気活動が起こるようになった。また、1991、2007年には八丁タルミの噴気孔から小規模な火山灰放出(微噴火)が起きている。そのため、1979年噴火以降の御岳火山の火山活動は、最近の250年間において最も活発であると考えられる。

1. はじめに

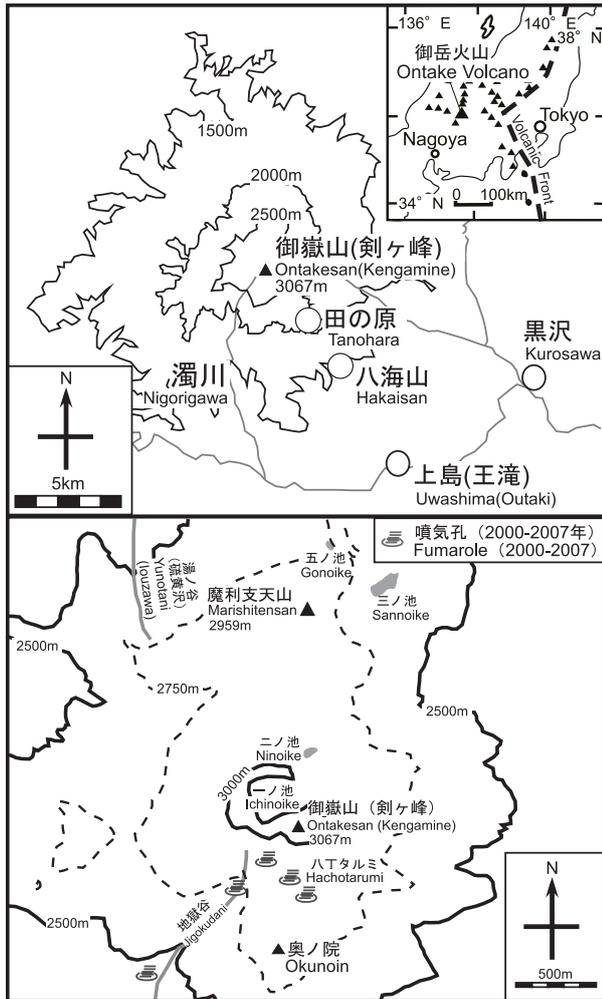
歴史資料(史料)には堆積物に残らないような小規模な噴火や火山活動の時間推移が記録されることがある。史料に基づく噴火史は地質学的手法に基づくものと補完的な関係にあり、精緻な噴火史を編むためには両者を組み合わせ活用することが必要不可欠である。しかし、史料に基づく噴火史の構築には、史料そのものの出典や信頼性の吟味を十分に行う必要がある。

有史の噴火記録がないとされ(例えば、神津, 1907,

1908)、噴火が予想されていなかった御岳火山(山名は、御嶽山ないし木曾御嶽山: 図1)は1979年10月28日に突然噴火し(曾屋ほか, 1979; 荒牧, 1980; 小林, 1980)、全国の活火山の見直しを促進させるきっかけとなった。この噴火の後、島田(1982)は774, 1892年に御岳火山が噴火した記録が存在すると報告した。この島田(1982)の記録は竹内ほか(1998)や多治見砂防国道事務所(2004)などでも紹介され、有史の噴火の再検討を行う必要性が指摘されていた。しかし、これらの噴火を記した史料の再検討はいまだ行われておらず、噴火記録として妥当であるかは明らかでなかった。御岳火山は1979年噴火後も、1991年4月中旬~5月と2006年12月末~2007年5月にかけて山頂直下の地震活動が活発化した後に微噴火(ごく小規模な火山灰の放出)を起こしており(木股ほか, 1991; 気象庁地震火山部, 2007など)、活動は依然活発である。そのため、今後の活動を予想するうえで過去の記録の整理・検討は重要である。今回、御岳火山の歴史噴火記録についての再検討を行なったところ、島田(1982)の指摘した774, 1892年の噴火は誤解や創作に基づくものであることが明らかとなった。その一方、1979年以前から存在した地獄谷の噴気活動は少なくとも最近250年間は継続していた可能性が高いことが明らかとなった。

なお、本文中での暦表記であるが、引用以外のものは、早川ほか(2005)の推奨にしたがい西暦はアラビア数字で和暦は漢数字で記し、西暦は天正十年九月十八日

¹地質情報研究部門(AIST, Geological Survey of Japan, Institute of Geology and Geoinformation, GSJ)



第1図 御岳火山の位置と山頂部の噴気孔分布図。

Fig. 1 Locality of Ontake Volcano and distribution of fumaroles at the summit area.

(1582年10月4日)まではユリウス暦で、その翌日の天正十年九月十九日(1582年10月15日)以降は現行のグレゴリオ暦で表記する。また和暦・西暦の変換はウェブツール「換暦」(<http://maechan.net/kanreki/>)を使用した。また、本論では、火山名としては「御岳火山」、地名としては「御嶽山」の表記を使う。ただし、引用文は原典に記されたままのものを使用する。

2. 噴火記録の検討

2.1. 宝亀五(774)年の噴火記録の検討

島田(1982)には『森田幸太郎先生が著された「木曾史話」には、『木曾三岳村黒沢の武居神官の家に伝わる「御岳縁起」によると、宝亀五年(774)に御岳地鳴りを起し、御神火を噴出した』と記されており、』という記述があり、これを根拠に宝亀五(774)年に御岳火山が噴火したと記した。

しかし、この噴火の記述の原典とされている「木曾史

話」(森田, 1968)には以下のように記されている。

「宝亀五年六月十三日(775年)、信濃守石川朝臣望足が御嶽に大巳貴命、小彦名命の二神を祭って疫病よけはらいを祈った、と御岳縁起(天正廿年、紀元1526年にかかれたもの)にあり、その真否はともかくとして、御嶽登山は奈良朝の昔からあったものと思われる。自然崇拝や靈魂崇拝は、先史民族時代からのもので、かれ等は驚異を感じさせる一切のものはカミとして尊敬し、その恩恵に浴し、その怒りを避けるためにこれを祀ったものであり、ましては時々地鳴りとともに御神火を噴出した御嶽は、古く先史民族時代から尊敬し崇拝された霊山であらう。」

このように、宝亀五(774)年に噴火があったとは書かれていない。しかも、森田(1968)も指摘しているように、宝亀五(774)年に御嶽山に神を祭ったことは史実としても疑われており、生駒(1987)なども同様の指摘を行なっている。そのため、たとえ縁起に噴火の事実が記されていたとしても宝亀五(774)年に噴火があったとは断定できない。更に、「西筑摩郡誌」(西筑摩郡誌編纂委員会, 1915)には、「宝亀五年六月十三日(775年)、信濃守石川朝臣望足大巳貴命小彦名命の二神を御嶽山に祭りて厄病除払いを」という森田(1968)と同様の記述があるが、これについても噴火やそれを示唆するような記述はない。また、楯(1980)は室町時代後半の永正、大永、弘治、天正年間(およそ16世紀)に、王滝村の神主家滝氏が記した御嶽山の祭文を調査した結果、御嶽山の噴火や鳴動に関する記録は一切残されていないことを記している。つまり、島田(1982)が宝亀五(774)年噴火の根拠とした史料に噴火記録は掲載されておらず、宝亀五(774)年の噴火は存在しなかったと断定できる。

2.2. 明治二十五(1892)年の噴火記録の検討

1915年発行の「西筑摩郡誌」には明治二十五(1892)年4月1日に「御嶽鳴動」という記録がある。更に、森田幸太郎著「木曾の明治百年」ではこの記録に「郡民非常に動揺す」という記述が加えられていることから、島田(1982)は御嶽山において噴火活動があったと断定した。しかし、島田(1982)が典拠とした史料には「鳴動」と記してあるだけで、噴火や噴煙の記載はまったくない。御嶽山周辺は地震活動が活発で、最近でも1984年にM6.8の長野県西部地震が起きており有感の群発地震もたびたび起きている(例えば、気象庁, 2005)。そのため、1892年の「鳴動」の記録は噴火活動であった可能性は残るが、地震活動であった可能性が高い。島田(1982)のように「鳴動」すなわち噴火活動と断定はで

きない。すなわち、1892年の「鳴動」の記録のみに基づいて噴火活動があったとは判断できない。なお、楯(1980)には、「木曾の明治百年」に加えられた「郡民非常に動揺す」の記述がどのような記録に基づくものか調査したがわからなかったと記されている。

3. 鳴動の記録

前述の明治二十五(1892)年の記録以外にも、御岳火山における鳴動の記録がいくつか残っている。楯(1980)は、山麓の王滝村で採録した御嶽山鳴動の体験記録をまとめている。この記録は、今まで火山研究関係者にあまり知られていなかったもので概要をここに紹介する。

明治三十四(1901)年生まれの方が、姑から「お山はいくら鳴ってもふきはせんで」という話を聞いている。これは姑が11月に御嶽山中腹の八海山において御嶽山の鳴動を聞き、逃げ帰ってきた体験談である。この鳴動は、明治のころであるか大正のころであるかはっきりしない。

更に、年代はまったく不明だが、1980年当時の田島家当主の先々代が王滝頂上の別当職をした時に、ひと夏お山が鳴った体験談が採録されている。

また、明治三十七ないし三十八(1904ないし1905)年春の夕暮れ時、御嶽山の方向でドカーンという大きな音が3回聞こえたとの体験談も採録されている。

これらの記録は、直接の体験談やそれを体験した親近者が聞いたもので信憑性が高い。そのため、発生年代ははっきりしないが明治から大正にかけてのいずれかの時期に御嶽山が鳴動をした可能性は高い。しかし、これらの鳴動に伴う噴火の記録は伝わっていない。

4. 噴気ないし噴煙活動の記録

1979年噴火以前にも御岳火山の地獄谷(図1)において噴気ないし噴煙(以下、噴気・噴煙と記す)活動があったことは知られている(楯, 1980; 小林, 1980; 山田・小林, 1988; など)。この噴気・噴煙活動がいつ頃から存在するかは定かでないが、その存在は、18世紀から多くの紀行文・学術報告書に散見される。以下に20世紀初頭まで記録を古いものから紹介する。

4.1. 18世紀の記録

宝暦七(1757)年に尾張藩主命によって木曾地方を巡視した松平秀雲が記録した「吉蘇志略」¹⁾(きそしりゃく)に、濁川上流の地獄谷に多くの硫黄が認められ、そこから流れ出る水は非常に硫黄臭く水が赤黄色に濁っていたことが記録されている。

〔御嶽〕の節「其北曰地獄谷、多硫黄其水流至王滝

曰濁川住々拾得硫黄臭、其水甚臭、」

〔濁川〕の節「出水御嶽地獄谷、頗有硫黄氣、水赤黄濁故名、与赤白二川合流本谷」

「吉蘇志略」は直接著者が調査し体験し記録したものをまとめており、その記述内容の信憑性は高い。これらの記録は、当時既に地獄谷においてなんらかの顕著な硫黄臭を伴う噴気・噴煙活動か温泉湧出があったことを示す史料であると考えられる。

4.2. 19世紀前半の記録

尾張の本草学者、水谷豊文が文化七(1810)年六月二十四日から七月二十七日にかけて行った採薬の記録「木曾採薬記」²⁾(乾・坤の2巻から成る)には、御嶽山における噴気・噴煙活動が記載されている。「木曾採薬誌」は本草学者の採集記であり直接著者が体験し記録したものをまとめている。そのため、記述内容の信憑性は高いと判断される。

記録は、硫黄についての記録と噴気ないし噴煙を描いた絵図に大別される。噴気・噴煙の記録は、坤の巻に掲載された御嶽山の絵図に認められる。それは御嶽山の東方から山を望んで描かれた絵図で、山頂左側山腹「ヤケジゴク」と記されているところに噴気ないし噴煙が描かれている。この描写は、絵図に記された地名・地形から、現在、山頂(剣ヶ峰)南南西の地獄谷とよばれている谷からの噴気・噴煙を記したものと推察される。

硫黄の記録は2つあり、乾、坤の巻の御嶽の説明で「硫黄谷」から硫黄を産することを以下のように記してある。

〔乾の巻〕「絶頂ニハ赤土ニ岩石多キ地ニテ草木絶テナシ北西ノ方硫黄谷ヲ臨目メバ甚険阻ナル谷ニシテ至ル了ヲ得ズ此谷ノ中腹ヨリ硫黄ヲ産ス上品ナリ」
〔坤の巻の御嶽の説明〕「絶頂東北ニ三池アリーノ池二ノ池三ノ池ト云四季雪アリ西北ノ方険阻ナル谷アリ硫黄谷ト云硫黄ヲ産ズ」

また、「硫黄谷」の下流の濁川で硫黄の匂いがすることも以下のように記してある。

〔坤の巻の濁川の説明〕「其源ニ赤川ト云アリ水色赤シ御嶽硫黄谷ヨリ出其源ニ白川ト云アリ水最清潔赤川ト合テニゴリ川ト云硫黄ノ気アリ水色赤黄色ナリ」

なお、上述の「硫黄谷」の場所が現在どの場所をさすかが問題となる。山頂の北西には、硫黄沢ともよばれる濁河(にごりご)川上流部の湯ノ谷があり(図1)、採薬記中の山頂からの方位の記述からそれが「硫黄谷」に相当するようにも読める。しかし、以下の理由で現在の

地獄谷が「木曾採薬記」では硫黄谷とよばれていたと考えられる。前述の「木曾採薬記」の坤巻、濁（にごり）川（山頂南南西の谷で濁河川と別の谷、図1参照）の説明の項にて濁川上流部の赤川の源流が硫黄谷であると記されている。濁川上流の赤川源流は現在の地獄谷であり、坤巻中の御嶽山登山道を示した絵図にも山頂南の現在の地獄谷付近に「イオウ谷」の地名が認められる。また、王滝の絵図に濁川の記載があり、これは現在の濁川的位置と同じ場所である。つまり、「木曾採薬記」では濁川上流部の赤川源流の現在の地獄谷付近を硫黄谷とよんでいたと推察される。しかし、「木曾採薬記」では硫黄谷は山頂の西北にあると記されているが、地獄谷は山頂の南南西に位置するため方位の記述には矛盾がある。著者の水谷豊文が方位を間違えた可能性もあるが判断する材料はない。

いずれにしても、絵図から19世紀初頭の1810年頃は、地獄谷付近で噴気・噴煙活動があったと考えられる。また、生駒（1987）に採録された御嶽古図（「木曾惣図」からの引用）にも地獄谷に噴煙ないし噴気が描かれている。この古図は、生駒（1987）は江戸後期の史料と考えているようであるが、出典の「木曾惣図」がいかなる史料かは不明である。

しかし、「木曾採薬記」に描かれた地獄谷の噴気・噴煙は、山麓から顕著に認められるほど、活発なものではなかったようだ。「木曾採薬記」とほぼ同時代に描かれた谷文晁（たにぶんちょう）の「日本名山図会」³⁾（1802年には絵の選定が終了：樋口、1970など）には、活火山が多く描かれており（富士山、浅間山、磐梯山、岩手山、鳥海山、白山、御嶽山、那須、北海道駒ヶ岳、有珠山、恵山、樽前山、羊蹄山、赤城山、立山、雲仙岳、岩木山、霧島、阿蘇山、榛名山、高原山、桜島）、その中には噴気・噴煙を描いたものが多数ある（恵山、浅間山、雲仙岳、阿蘇山、霧島、桜島）。日本名山図会は作者の谷文晁が実際に山岳を見て描いた（北海道の5山のみ弟の元旦（げんたん）が写生したものを基に描きなおした。）と考えられているため（新海ほか、1992；住谷、1999）、その当時の山麓から顕著な噴気・噴煙が存在したかを判断できる史料と考えられる。しかし、御嶽山には噴気・噴煙が描かれていない。また、「伊能図大図」⁴⁾に描かれた鳥海山、浅間山、阿蘇山、桜島などの火山には、噴気・噴煙が記されたものが存在する（例えば、星埜、2004）。「伊能図」は伊能忠敬が1800～1816年にかけて実際に諸国の海岸線や街道をめぐり実測した記録を基に製作されている。「伊能図大図」はそのうち最も縮尺が大きいものである。そのため、「伊能図大図」に描かれた火山の噴気・噴煙の有無によって、その当時、海岸線や街道筋から観察できるほど顕著な噴気・噴煙が存在したかを判断できると考えられる。この大図にも御嶽山には噴煙が描かれていない。つまり、19世紀前半には

地獄谷で噴気・噴煙活動があったが、それは山麓から望めるような活発なものではなかったと判断される。

4.3. 19世紀末から20世紀初頭の記録

村誌王滝 上巻（王滝村、1961）に採録されている「地理風俗書上」⁵⁾に地獄谷の噴気が記録されている。「地理風俗書上」は陸軍省に対して明治五（1872）年に王滝村から提出された地理概要調査書であることがその文中に記されている。噴気活動の記録は次のように記されている。

「火山と申程ニハ無之候得共御嶽山西方ノ地獄谷と申所常ニ烟リ立候」

また、地獄谷から硫黄が産することも記されている。

「硫黄 御嶽山西ノ方地獄谷と申所ニ有之候道五里半程難道ニ而候」

つまり、明治五（1872）年にも地獄谷で噴気・噴煙活動があった。この報告は、公的なものなので記述内容の信頼性は高いと考えられる。

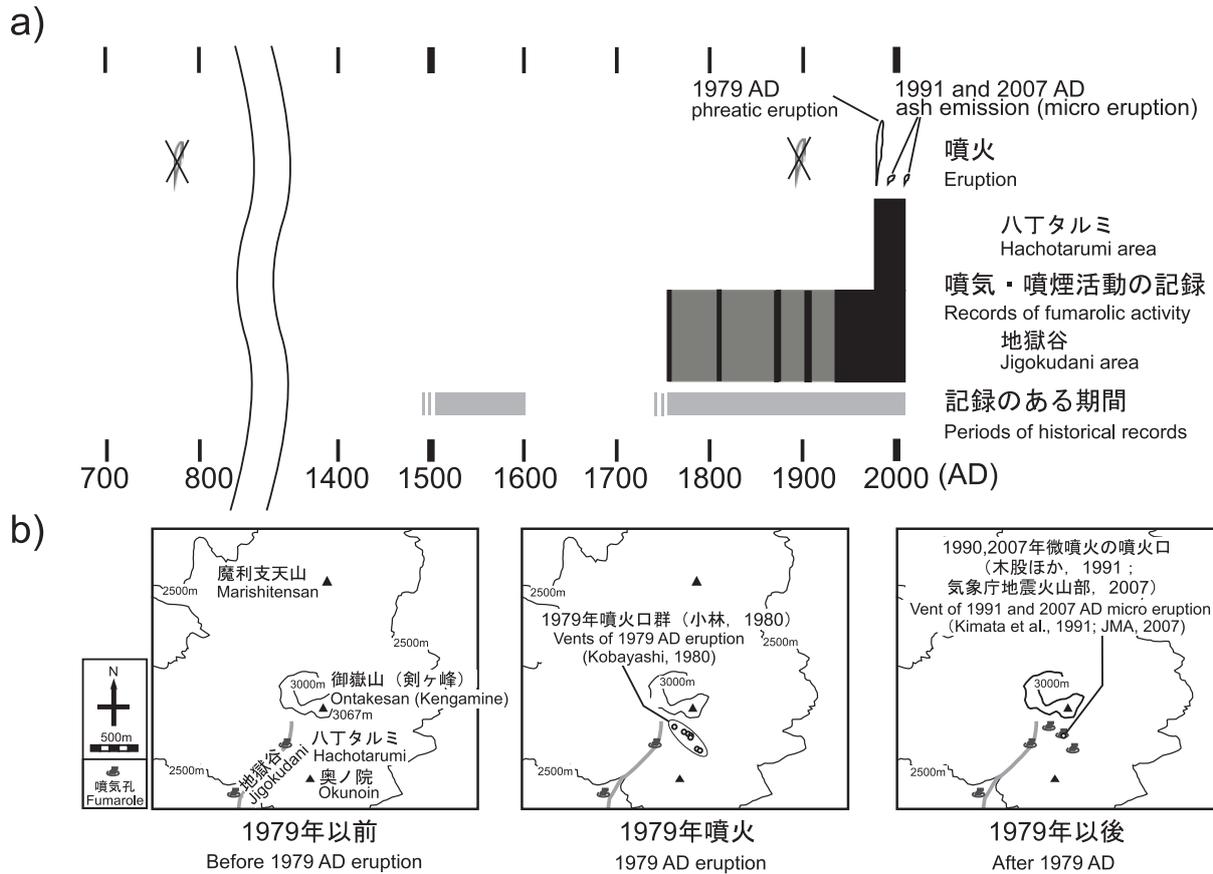
明治に入ると、多くの外国人が御嶽山に登り紀行文を残している（生駒、1987）。これらの記録は実際に現地を足で運んで観察したものであるから信頼性は高いと判断される。明治七（1874）年に登頂したイギリス人ワイウイー・ハウスと明治八（1875）年に登頂したアーネスト・サトウは、明治十四（1881）年に「中部及び北方日本旅行案内」という本（原著は英文）を出版し、御嶽山登山について詳しい記述を行なっている（生駒、1987）。生駒（1987）に採録された「中部及び北方日本旅行案内」の翻訳文によると、地獄谷で硫気孔が存在すること、有史の噴火記録がないことなどが記されている。

更に、科学論文においても地獄谷における噴気活動が記録されている。初期のものとしては、坂（1887）による「硫烟を発するところ」との報告、佐藤（1905）の「往時活動の余勢として今尚硫気洞を在す。」との報告、神津（1907、1908）の少量のガスを噴出していること、硫黄と石膏を産することの報告などがある。

これらの記録から、19世紀後半から20世紀初頭にかけても地獄谷で噴気活動があったことが伺える。

4.4. 1979年噴火以前の20世紀後半の記録

楯（1980）は、御嶽山山麓の住民からこの時期の体験談を採録している。それによると、1979年以前の地獄谷の噴気・噴煙活動は、1979年に噴火した火口ではなく、奥ノ院直下の地獄谷の中腹においてのみ起きていた。そこでは、噴気だけではなく熱い温泉が湧き出ており、小屋の人たちが温泉として利用していた。大正の頃



第2図 史料に基づく御岳火山の火山活動のまとめ。A) 噴火、噴気・噴煙活動の時間的変化。B) 噴気孔と火口の時代変遷図。
 Fig. 2 Summary of volcanic history at Ontake Volcano from the historical records. A) Temporal distributions of eruptions and fumarolic activities at Ontake Volcano. B) Map showing the temporal distributions of eruption vents and fumaroles.

か明治の頃からかはっきりしないが地獄谷の温泉をくみ上げ「薬湯」と称し信仰の湯としていた。昭和四十年頃は、そこはぶくぶくって蒸気が少しでていた程度であるが、最近(1979年噴火直前)はモヤモヤした水蒸気が1mほどの高さで何ヶ所も出ており、硫黄くさくて30分ほどしかおれなかったなどの多くの体験談が記録されている。また、小林(1980)や山田・小林(1988)にも1979年噴火前に地獄谷において噴気・噴煙活動があったことが記されている。このように、1979年噴火の直近の時代にも地獄谷で噴気・噴煙活動が続いていたことは明らかである。

5. 史料からみた最近250年間の御岳火山の活動

前述の記録を基に噴火・噴気活動をまとめると図2のようになる。島田(1982)に採録された774年と1892年の「噴火記録」は、誤解や創作に基づくものであり噴火記録とは認めがたい。御嶽山は、日本有数の山岳信仰の聖地であり古くから宗教登山が行われている。特に天明二(1782)年の覚明行者による黒沢口からの登山路の整備、寛政四(1792)年の普寛行者による王滝口からの登山路の整備などによりそれまで禁止されていた一

般信者の登山が盛んになり、夏期に数多くの人々が御嶽山に登るようになった(西筑摩郡誌編纂委員会, 1915; 森田, 1970; 生駒, 1987など)。そのため、18世紀後半以降、御岳火山で噴火があれば何らかの形で記録が残されていると考えられるが、現在のところ、噴火記録は未発見である。明治から大正にかけて、御嶽山での鳴動の記録がいくつか残っている(楯, 1980)。そのうち年代のはっきりしているのは1892年と1904ないし5年のものである。しかし、それらの鳴動も噴火を伴うものではない。また、室町時代後半(16世紀頃)に書かれた御岳神社の祭文の調査によっても噴火や鳴動に関する記録は一切残されていない(楯, 1980)。よって、現在のところ御岳火山の噴火を示す史料は存在しない。これらの結果から、少なくとも室町時代後半(16世紀頃)及び18世紀後半～1979年間は、御岳火山の噴火はなかった可能性が高い。

しかし、18世紀半ばから1979年噴火までの間、山頂付近の地獄谷において噴気・噴煙活動の記録が多数残っている。それら記録に基づくと、噴気・噴煙活動は地獄谷における記録のみ記されており、それ以外の地域における噴気・噴煙活動の記録は皆無である。この地獄谷の噴気・噴煙は、おそらく、現在と異なり奥ノ院下の噴気



第3図 御嶽山山頂(剣ヶ峰)南から望む八丁タルミにおける噴気・噴煙活動(2007年10月15日撮影)。顕著な噴気・噴煙活動が認められるのはS3(第7)火口。

Fig. 3 Fumarolic activities in Hachotarumi from the Ontake Volcano's summit (Kengamine) on October 15, 2007. Remarkable fumarolic activity is occurring at S3 (the seventh) vent.

孔から発生していたと考えられる。また、この噴気・噴煙は、「日本名山図会」や「伊能図」などの史料から、19世紀初頭においては現在と同じく山麓から顕著に望める規模のものではなかった。

1979年噴火は、地獄谷内の奥ノ院下の噴気孔からでなく、地獄谷源頭部と外側の八丁タルミにおいて開いた噴火口群から起きた(小林, 1980; 山田・小林, 1988など)。これら火口群のうち、いくつかのものは、現在も噴気・噴煙活動が認められる(図2, 3)。更に、1991, 2007年の微噴火は八丁タルミにおける1979年火口から起きた。これは、19世紀初頭から1979年までの間、噴気・噴煙活動の記録が地獄谷に限定されているのと対照的である。つまり、1979年噴火から現在(2008年)の間は噴気・噴煙活動が活発で、それ以前の約200年間より火山活動が活発化していると考えられる。

6. まとめ

島田(1982)が報告した774年と1892年の噴火は存在しなかった。明治以降、御嶽山で鳴動が聞こえた記録がいくつか存在するが、年代の明らかなものは1892年4月と1904ないし1905年のもののみである。18世紀後半からの御嶽山における宗教登山の活発化を考慮すると、1979年噴火と同程度ないしそれより規模の大きな噴火は最近250年間においてなかった可能性が高い。

御嶽山山頂部では、地獄谷の中腹において少なくとも18世紀半ばより小規模な噴気・噴煙活動が継続していたが、1979年噴火の後、地獄谷源頭部と八丁タルミにおいても噴気・噴煙活動が起こるようになった。そのため、御嶽火山の火山活動は、1979年以降、大局的には

活発化したと考えられる。

謝辞：日本工営の田島靖久氏には御嶽山の噴気・噴煙活動を記録した文献の紹介をしていただいた。査読者の須藤 茂氏と編集担当の松林 修氏のコメントは、本稿を改善するのに大変役立った。ここに記して感謝いたします。

文献

- 荒牧重雄(1980) 木曾御岳火山1979年噴火-噴火の観察と火山灰-。御岳山1979年火山活動および災害の調査研究報告, 文部省特定研究「木曾御岳山噴火活動および災害の総合的調査研究」代表:青木治三, 1-3.
- 早川由紀夫・小山真人・前嶋美紀(2005) 史料に書かれた日付の西暦換算と表記法。月刊地球, 27, 848-852.
- 樋口秀雄(1970) 谷文晁の画譜覚書。日本名山図会, 国書刊行会, 200p.
- 星埜由尚(2004) よみがえる200年前の日本, 200年前の日本の山河。地図中心, 号外「号外 伊能大図記念号」, 11-15.
- 生駒勘七(1987) 御嶽の信仰と登山の歴史。三岳村誌上巻, 三岳村誌編纂委員会編, 長野県, 643-907.
- 木股文昭・山岡耕春・藤井直之(1991) 木曾御岳火山における小規模な噴火(1991年5月)。日本火山学会講演予稿集, 1991, 2, 168.
- 気象庁(2005) 御嶽山。日本活火山総覧, 気象庁, 635p.
- 気象庁地震火山部(2007) 平成19年1月, 2月, 3月, 4月, 5月 火山活動解説資料 御嶽山, 気象庁, 7p., 7p., 7p., 5p., 7p.
- 小林武彦(1980) 御岳火山1979年火山活動。御岳山1979年火山活動および災害の調査研究報告, 文部省特定研究「木曾御岳山噴火活動および災害の総合的調査研究」代表:青木治三, 4-12.
- 神津俣祐(1907) 木曾御岳火山地質調査報告。震災予防調査会報告, no. 59, 1-63.
- 神津俣祐(1908) 木曾御岳火山論。地学雑誌, 20, 325-336, 403-421.
- 宮崎克則(2006) シーボルト「NIPPON」の山々と谷文晁「日本名山図譜」。九州大学総合研究博物館研究報告, no.4, 39-92.
- 森田幸太郎(1968) 木曾史話。改定3版, 千村書店, 長野県木曾福島, 187p.
- 西筑摩郡誌編纂委員会(1915) 西筑摩郡誌。西筑摩郡誌役所, 長野県, 666p.
- 王滝村(1961) 村誌王滝 上巻。王滝村, 長野県,

956p.

坂 市太郎 (1887) 飛騨四近地質報文. 地質要報, 農商務省地質局, no.3, 205-307.

佐藤傳蔵 (1905) 御岳火山管見. 地質学雑誌, 12, 17-22.

信濃史料編纂會 (1914) 信濃史料叢書 第四卷. 信濃史料編纂會編.

島田安太郎 (1982) 御嶽山 地質と噴火の記録. 千村書店, 長野県木曾福島町, 315p.

新海祥子・堀 繁・油井正昭 (1992) 「日本名山図会」に見る谷文晁の名山観. 造園雑誌, 55, 49-54.

曾屋龍典・近藤善教・下坂康哉 (1980) 御岳山 1979 年噴火. 地質ニュース, no.306, 6-13.

住谷雄幸 (1999) 江戸人が登った百名山. 小学館文庫, 小学館, 東京, 453p.

鈴木純子 (2004) 伊能図のあらまし. 地図中心, 号外「号外 伊能大図記念号」, 19-21.

多治見砂防国道事務所 (2004) 資料集 御岳崩れ. 国土交通省多治見砂防国道事務所, 岐阜県, 263p.

竹内 誠・中野 俊・原山 智・大塚 勉 (1998) 木曾福島地域の地質. 地域地質研究報告 (5 万分の 1 地質図幅), 地質調査所, 94p.

楯 英雄 (1980) 木曾御岳山噴火に関する聞き書き. 伊那, 28, 14-19.

渡辺一郎 (2000) 図説 伊能忠敬の地図をよむ. 河出書房新社, 東京, 111p.

渡辺一郎 (2004) 伊能図発見物語. 地図中心, 号外「号外 伊能大図記念号」, 22-24.

山田直利・小林武彦 (1988) 御嶽山地域の地質. 地域地質研究報告 (5 万分の 1 地質図幅), 地質調査所, 136p.

安田 健 (1994) 解題. 浅見 恵・安田 健訳編「近世歴史資料集成 第 2 期第 6 卷 採葉志」, 霞ヶ関出版, 東京, 1251-1256.

付記：史料解説

1) 「吉蘇志略」

宝暦七 (1757) 年に成立. 尾張藩士で儒者の松平秀雲 (子竜君山, 龍吟子とも称する) が藩主の命で宝暦七 (1757) 年に木曾地方を巡視し地理沿革を記録したもの. 今回の検討は, 信濃史料叢書第 4 (信濃史料編纂會, 1914) と村誌 王滝 上巻 (王滝村, 1961) の p.297-303 にも採録されたものを使用した.

2) 「木曾採葉記」

尾張藩士の本草学者, 水谷豊文 (1779 ~ 1833) が文化七 (1810) 年六月二十四日から七月二十七日 (旧暦) にかけて木曾地方で行った採葉の記録. 乾・坤の 2 巻からなる (安田, 1994). 御嶽山には七月十日夕刻に黒沢

を発ち, 中の小屋, 千本松を經由して山頂を極め, 七月十一日に田の原で宿泊, 七月十二日に田の原から三笠山を越え上島に下っている. 今回の検討には, 霞ヶ関出版刊の浅見 恵・安田 健訳編「近世歴史資料集成 第 2 期第 6 卷 採葉志」(1994 年発行) に収められた, 国立国会図書館 伊藤文庫蔵本の影印本を使用した.

3) 「日本名山図会」

谷文晁 (1763 ~ 1840) 画の「日本名山図譜」(文化元 (1804) 年発行, 1802 年に図版の選別は終了) に, 文化九 (1812) 年, 岩手山, 姫神山の 2 葉を加え, 版を縮小して「日本名山図会」として発行したもの (樋口, 1970; 住谷, 1999). 前書きに「余, 幼より山水を好み, 四方を漫遊し, ことごとくに名山大川に遇えば, 必ず図にして収む.」と記され全国の山を写生していたと推察される. 更に, 松平定信が記した「退閑雜記」前編 (寛政五~九年: 1793 ~ 1802 年著) の谷文晁の人物評に「田邸の文晁 通名文五郎 画の事に達したりけり, ことに好事好古の癖あり, また山水をこのむ, 年おさなき頃より諸国を遊歴し, 我国において行きみざる国は四, 五ヶ国に過ず, 名士みなかれが交るところとす, わづか三そぢ余りなり」と書かれており, 名山図譜を出版したころには日本中を遊歴していたと考えられる (宮崎, 2006). ただし, 北海道の 5 山は実弟の元旦が写生した物をもとに描きなおしたものであり実際には見ていない (新海ほか, 1992; 住谷, 1999 など). 新海ほか (1992) の考証によると, 実際に見たか判断できない山は, 火山については, 鳥海山, 立山, 白山, 阿蘇山, 霧島, 桜島 (御岳) のみで, これらも当時の交通事情を考えると実際に見て写生したのであろうと結論づけている. また経歴や自序の記述から, 収められた図版は北海道を除き実際にその風景を見て書いたものであると判断されている (樋口, 1970; 住谷, 1999). 以上の経歴と図会の成立時期により, 18 世紀末から 1802 年までの写生時期の噴煙の状態を記録していると考えられる. 今回の検討には, 国書刊行会刊「日本名山図会」(1970 年発行) に採録された文化 9 年刊の影印がある複製本を使用した.

4) 「伊能大図」

伊能忠敬 (1745 ~ 1818) が寛政十二 (1800) 年から文化十三 (1813) 年にかけて全国を実測し, 製作した地図が伊能図である. 伊能図は, 彼の没後の文政四 (1821) 年に, 大図 (214 舗 1 組, 縮尺 1/36000), 中図 (8 舗 1 組, 縮尺 1/216,000), 小図 (3 舗 1 組, 縮尺 1/432,000) からなる「大日本沿海輿地全図」として幕府に提出された (鈴木, 2004). しかし幕府に提出された正本, 伊能家の控図である副本 (後に明治政府に提出) ともに焼失しており, 現在残っているのは忠敬が諸大名や幕府の重臣に贈ったものやその模写図などわずかな数

に過ぎない(渡辺, 2000). 特に大図は, 国内で存在が知られているものはわずか60数枚であったが, 2001年3月に米国議会図書館で渡辺一郎氏により未確認分148枚を含む207枚が発見され, その全貌がはじめて明らかとなった(渡辺, 2004). なお, 伊能図は成立の経緯により正本, 副本, 稿本, 写本, 模写本に区分される(渡辺, 2000)が, 米国議会図書館で発見された大図は模写本に区分される(鈴木, 2004).

伊能図は海岸や街道沿いの風景は詳しく描かれているが, 内陸部の情報は乏しい. しかし, 伊能図は各所から望める高山の方位を各所から測定する交会法と呼ばれる測量方法を多用し地図を製作した. 本研究で対象とした御嶽山は, 交会法に使用した山の一つであり, 伊能図に描かれている.

今回の検討には河出書房新社刊の日本地図センター編, 渡辺一郎監修「伊能大図総覧」(2006年発行)に採

録された米国議会図書館蔵の大図を使用した.

5) 「地理風俗書上」

文中の記述によると, 陸軍省に対して王滝村の名主, 組頭らが明治五(1872)年六月に提出した地理概要調査書である. また, これを要略し補足したものを明治六(1873)年三月にも筑摩県権令永山盛輝宛に提出している. 村落, 河川, 動植物, 山岳などの多岐にわたる項目について箇条書きに記されている. 提出書類には詳細な絵図も添付されていたようであるが, 文章のみ「村誌王滝 上巻」(王滝村, 1961)のp.303-315に採録されている. 今回検討したのはそこに採録されたものを使用した.

(受付: 2008年3月19日; 受理: 2008年7月31日)